

# 新訳がひきつぐ東北方言イメージ

## 『風と共に去りぬ』にみる黒人のことば遣いを中心に

熊谷 滋子

### 1. はじめに

古典、名作の新訳が活気づいている。アメリカ文学の『風と共に去りぬ』（以後、『風』と略す）も、2015年、鴻巣友季子氏（翻訳家）と荒このみ氏（アメリカ文学研究者）が相次いで新訳を出版している。1巻目の帯紙には、「黒柳徹子さん推薦！「最後の一言がこんなにぴったりな訳は初めて。スカーレットがますます好きになりました！」」（鴻巣訳）、「あなたの知らないスカーレットがここにいる！原作世界に新たな命を吹き込む、生き生きとした新訳！」（荒訳）と新訳のすばらしさを謳いあげている。新訳が出版され、改めて作品を読み直し、味わい、感嘆したという好意的なコメントも寄せられている<sup>(1)</sup>。大久保康雄・竹内道之助氏の訳（初版は1977年。以後、旧訳と称す）に比べ、注解や図解、関連年表、巻末の訳者解説などが充実しており、南北戦争当時のアメリカ社会を理解しやすくする工夫もところみられている。

本稿では、新訳の中でも特に黒人奴隷のことば遣いの文末表現に注目し、旧訳と比較する。本作品のみならず、文学作品などの翻訳では、一般的には、社会的に周縁におかれた登場人物、特に黒人奴隷のことば遣いに「おねげえしますだ」「ありましねえだ」といった独特の表現が用いられ、それが東北方言のイメージと結びつけられてきている。ロング・朝日（1999）は、アメリカのテレビ番組や映画において、無教養の田舎者は南部訛りの英語を用い、翻訳されると東北・関東方言などになることから、東北方言のイメージがいいとはいえないと考察している<sup>(2)</sup>。

また、中村桃子（2013：49）は、「現在では、黒人の登場人物の発言を「ごぜえますだ」と訳すことは、少なくとも新しく翻訳される場合にはほとんど行われなくなった」と指摘し、さらに、字幕翻訳家である戸田奈津子（2014）も、「かつては南部なまりの黒人英語に東北弁ふうの字幕をつけたが今はや

らない」とコメントしている（『朝日新聞』2014年9月8日）<sup>(3)</sup>。

今回は、まず、新訳が、旧訳の東北方言のイメージと結びつけられている黒人のことば遣いを引き継いでいるか、次に、旧訳も含め、使用されていることば遣いがどの点で東北方言だと勘違いされてきたのか、関連して、「粗野」と思いこまれてきた東北方言にも丁寧な待遇表現があることを示す。そして、最後に、標準語を基本とする白人のことば遣いにもふれながら、白人と黒人の序列を反映するあまり、翻訳が日本語の標準語と方言の序列、ひいては日本社会の中央と地方の序列をも再生産してしまっていることを指摘したい。紙面の都合で、黒人のことば遣いについては、調査対象を絞り、黒人奴隷のうち、男女それぞれ2名ずつを分析する<sup>(4)</sup>。白人のことば遣いについては、翻訳のあり方について考える3.3で扱う。

## 2. 具体例

ここでは、まず、黒人奴隷たちのことば遣いを旧訳と新訳を並べて引用し、具体的にみていく。女性黒人は、ともに主人公スカーレットの家の奴隷で、長年にわたる忠実な「乳母」であるマミー（中年）と、うそつきで間抜けとされるプリシー（若者）、男性は、主人公の男友達のスチュアート家の馬丁であり、貧乏白人に反感をもち、小生意気とされるジェームズ（老年ではない）と、主人公の最初の夫の叔母ピティパットの御者で、「黒人にしては」かしこく、気がきくとされるピーター（老年）である。以下の引用中の二重下線部分は後述する特徴の①～③を示し、点線によるそれは④を示しているが、今回引用する箇所は、旧訳と並べてその差の一端を示すためであり、全ての特徴を網羅しているわけではない。引用後のカッコ内は、ページ数（1巻目の場合は、巻数は省略）、旧訳はO、鴻巣訳はK、荒訳はAで示す。

まず、最初は、マミーがスカーレットに、淑女のたしなみを教え諭す場面である。

「若い令嬢が、むずかしい顔つきをして、あごをつんだして、『わたしはこうしたい』とか『こうしたくない』とか、そんなことをいうと、殿方はし

らけてしまうだ」とマミーは、むずかしい顔をして言った。「若い令嬢というものは、目をふせて、ただ、『そうですか』とか『おっしゃるとおりですわ』とかいわなくちゃいけねえだ」(124、O)

「すぐに顔しかめたり顎つきだしたりして“あれしたい”“これしたくない”なんて言うお嬢さんじゃあ、おおかた旦那だんなさんはつかまないね」マミーは長女の将来を憂うれえた。「お嬢さまちゅうのは目をふせて、“はい、そういたしましょう”“ええ、おっしゃるとおりですわ”って言うものですよ」(132、K)

「『あたいこうする』『こうしねえ』なんて、顔しかめ顎しゃくり上げる娘っ子にゃ、旦那さま見つけるなんてえ、できっこねえ」。マミーが陰気な声で予言した。「娘っ子は目え伏せて、『ええ、おっしゃる通り、サー』と答えるんでごぜえますよ」(141-142、A)

次は、友達メラニーが出産間近なのに誰にも頼れない緊迫した状況にあるスカーレットを、プリシーが励ます場面である。

「スカーレット嬢さま、メラニーさまのお産のとき、せんせい医師が見つからなくても心配することはねえですだ。わたしがやれますだ。わたしは、お産のことは、なんでも知ってますだよ。おふくろが産婆だからね。おふくろは、わたしも産婆にしようとしたですだ。みんなわたしにまかせておけばええだよ」(2巻、247、O)

「スカーレット嬢さま、メリーさまのお産でお医者がつかまらないでも心配いらねえだ。おらがなんとかするだよ。お産のことはなんでもわかってっから。だって、うち母ちゃんは産婆でねえか？ おらも産婆になるよう育てられたでねえか？ おらにまかしとけ」(2巻、262、K)

「ミス・スカーレットさま、ミス・メラニーさまがお産を迎えたってえ、  
医者がいねぐだってえ大丈夫でっすよ。あたいがどうにかやれまっす。<お  
産>についちゃあ、隅から隅までよく知ってますだ。だってあたいのおっ  
かあは産婆じゃねえでっすか。そいであたいも産婆になるようにって仕込ん  
だんですっから。あたいに任せてくだっせえ」(3巻、106、A)

以下は、ジェームズが、仕えているスチュアート家の双子の兄弟に、楽し  
そうに話していたスカーレットが急にだまりこんだ時の状況を説明する場面  
である。

「いいえ、おまえさまがたは、あのかたを怒らせるようなことはおっしや  
いませんでしたよ。あのかたが会いたがっていなさるところへ、おまえさ  
まがたがおいでになったもんだで、たいそうよろこんでいなすっただ。そ  
して小鳥のようにさえずっていなすっただ。それが、アシュレさまとメ  
ラニー・ハミルトンさまが結婚なさるちゆうことをおまえさまがたが話  
すと、急に鷹が上を飛ぶときの小鳥のように黙っておしまいなすっただ」  
(26、O)

「いや、お嬢さん怒らせるようなこと、おふたりは言わねがったと思うっ  
す。お嬢さんはおふたりに会っておひさしぶりいって喜んでるみてえで、  
ずうっと鳥みたいにごきげんでしゃべくってたですよ。アシュリさんとメ  
リー・ハミルトンさんの結婚話が出るまでは。その話が出たら、鷹が飛ん  
できて小鳥が黙るみたいに静かになっちまって」(29、K)

「そんだったらことねえ、旦那さま。ミス・スカーレットさまを怒らすっなん  
てえこと、なんもおっしやってねえ。お二人に会われて、とうってもお喜  
びで。お留守の間、寂しがっだってえ。まるで小鳥のようにしあわせいっ  
ぱい、さえずっておいでなすった。ところがでごぜえます、ミスツ・ア  
シュリーさまとミス・メリー・ハミルトンさまのご結婚てえこどっになっ

て、ミス・スカーレットさま、空飛ぶタカにねらわれた小鳥みてえに、急に黙っておしめえになって」(39-40、A)

最後に、スカーレットを迎えにきたピーターのあいさつである。

「スカーレット嬢さまでがすね？ ピティさまの御者のピーターでごぜえますだ。あつ、泥んなかへおおりになっちゃいけましねえだ」と、スカーレットがおりようとしてスカートをたくし上げたのを見ると、彼は、きびしく命令した。(301、O)

「スカーレットさんかね？ わしはミス・ピティの御者でピーターと申す。泥に気をつけなされ」男がいか厳めしく命じてくるので、スカーレットは降りる準備として、まずスカートの裾をたくしあげた。(315、K)

「ミス・スカーレットさまでごぜえますか？ ピーターでごぜえますだ。ミス・ピティさまの御者で」。スカーレットがすそをたばねて降りようとすると、「こんなぬかるみん中へ、ご自分で降りるなんざあ、なさらねえでくだせえ」と、厳しく制した。(2巻、24、A)

以上あげた具体例について、これらの登場人物たちの特徴を、以下の表1にまとめる。項目としては、旧訳を基本として、①連母音の融合 (/ai/ → [e:] [例] ございます→ごぜえます)、②一人称、③文末表現の「だ」(「動詞(敬語を含む)・「です/ます」(以上は過去形も含む)などの最後に「だ(+よ)」を付加する言い方。[例]「来るだ」「おいでになりましただ」)などについてみている(あてはまる場合は○とする。△は旧訳よりも使用頻度が低いことを示す)。旧訳と違う特徴については、④に、それぞれ列挙する。特に、「思っとる」「しとる」「しよる」「しておる」「言うて」については、西日本方言の特徴が使用されていることを示すためにあげている。

表1 旧訳・新訳の黒人のことば違いの特徴

	訳者	①融合	②一人称	③「だ」	④旧訳と違う特徴
マミー	旧訳	○	わたし	○	
	鴻巣	×	あたし	×	文末のぼし「～だあ」「～よお」
	荒	○	おら	○	濁音、格助詞「さ」、「思っとる」
プリシー	旧訳	○	わたし	○	
	鴻巣	○	おら	○	
	荒	○	あた	△	濁音、促音「まっす」、「しとる」
ジェームズ	旧訳	○	おいら	○	
	鴻巣	○	おいら	△	「～っす」
	荒	○	おいら	△	濁音、促音「怒らっす」
ピーター	旧訳	○	わし	○	「言うて」
	鴻巣	△	わし	×	「じゃ」「しよる」「申す」
	荒	○	わし	○	濁音、格助詞「さ」、「しておる」

表1からみえてくることとして、まず1つ目に、連母音の融合形については、鴻巣訳でのマミー以外は、基本的に継承されている。3.1で述べるように、これは、東北方言の特徴と誤解されているものである。2つ目に、男性黒人の一人称は旧訳でも新訳でも変わらないが、女性黒人のほうは変化している。特に、新訳では、鴻巣訳、荒訳ともに、女性黒人のうちどちらか一方に「おら」を使用している。3つ目に、③の「だ」表現は、概して、旧訳の場合、どの黒人にも使用されていたが、新訳では、登場人物に応じて、多少の訳し分けをしている。鴻巣訳では、プリシーとジェームズに継承されている。一方、荒訳では、旧訳ほど頻繁ではないものの、どの黒人にも継承されている。4つ目に、新しい特徴として、鴻巣訳では、ジェームズが、くだけた若者ことばである「～っす」を、ピーターが「ご説明申す」「お子」(子ども)など、あるじに対して忠誠を誓うような、いわば侍風のことばを使っている。また、荒訳では、「おっがねぐって」(おっかなくて)というように、濁音をむやみやたらとつけているのが目立つ。さらに、促音「っ」をいろいろなところに挿入し、「大丈夫でっすよ」「任せてくだっせえ」など、発音しにくい表現も少なくない。

新訳の特徴をまとめると、鴻巣訳では、女性については、プリシーは依然として旧訳のようなことば遣いを継承しているが、マミーは従来の黒人ことばを使わない。男性については、旧訳のようなことば遣いを薄め、ジェームズは若者ことばを、ピーターは、いわゆる侍風のことばを使っている。これに対して、荒訳のほうは、旧訳よりもなお一層、一人称「おら」や方向を示す格助詞「さ」（実際は、方向を示すという本来の機能以外でも使用しているが）を使用し、また、濁音化するなど、東北方言の特徴を、時に不正確に、かつ頻繁に使い、そのイメージをむしろ強めて訳しているように思われる。が、「思つとる」「しとる」などの西日本方言も少し混ぜている。

さらに、ピーターについていえば、金水敏（2003）のいう役割語のひとつである「博士語」、あるいは、西日本方言の特徴ともいえる「わし」「～じゃ」「おる」（いる）なども使われている。他の黒人たちが、もっぱら東北方言的なイメージをもったことば遣いをしているのに対照的である。実は、主人公スカーレットの父であるジェラルドにも、「博士語」もしくは、西日本方言的な特徴をもったことばが継承されている。この点については、後で述べる。

### 3. 黒人のことば遣いからみえてくること

#### 3.1 はたして、東北方言なのか？

上の表1であげた項目のうち、②の一人称「おら」は東北方言の特徴と考えられる（今回は文末表現を中心に考えるが、一人称には方言の特徴があらわれているので、語彙だが調査対象とした）。しかし、①と③については、東北方言と思われることもあるが、実はそうではない。

まず、ロング・朝日（1999）は、日本語吹き替え版の映画におけるプリシーのことばが、「おら」と連母音の融合（/ai/ → [e:]、[例] 否定辞「ない」 → 「ねえ」）という特徴をもっていることから、東北方言であると判断している。「おら」は東北方言の特徴だとしても、融合については、疑問が残る。東北方言に関する研究書（例えば、本堂（1982）、東条（1961））では、ロング・朝日のあげた例は、/ai/ → [e] といった連母音が短母音になるものとして記述されており、必ずしも全てが /ai/ → [e:] になるわけでもない。また、

連母音の融合は、東北方言だけの特徴といいきれないことも指摘されている。

また、Hiramoto (2009) は、『風』を分析し、表にあげた① /ai/ → [e:] と、③「だ」を東北方言の特徴として論じている。Hiramoto は、これらを含めて、いくつかの言語特徴をあげ、全てが正確な東北方言とはいえず、疑似東北弁的なものもあることを指摘し、それを翻訳で黒人のことば遣いに用いるのは、結果的に、黒人たちのみならず、東北弁、東北弁話者たちを侮辱することになっていると主張している。この点については、全く賛成である。が、特に、東北方言とみなしている③の「だ」の表現について、都川典子 (1994 : 97) は、『アンクル・トムの小屋』における黒人のことば遣いを調査した結果、「助動詞「ダ」を文末詞的に用いる拡張用法はどちらかといえば東北地方の外で広くおこなわれているものである」と、藤原与一 (1959) の実証をもとに考察している。その上で、都川は、現実には、「方言イメージの点から考えるとこれらの特徴は一般的に、東北弁のものと受け取られて」しまっていると指摘している<sup>(5)</sup>。都川の懸念が示すように、先にあげたような言語研究者でさえ、黒人のことば遣いのイメージが東北方言によるものだと思い込んでしまっている。それだけ翻訳を含めたメディアの影響には無視できないものがある。

### 3.2 東北方言の待遇表現

黒人奴隷たちは白人たちに仕える下僕であるため、ことば遣いはへりくだりが強くなるのは当然であろう。英語の原文はともかく、翻訳では、表1の③であげたような表現が頻繁に登場する。標準語の敬語や丁寧表現を用いながら、最後に「だ」を付加する。「ごぜえますだ」「お留守ですだ」「いらっしゃらねえだ」といった調子である。

東北方言は敬語や丁寧表現などあまりなく、ぞんざいで粗野なことばだという印象をもたれている。しかし、例えば、東北の岩手県では、以下のような待遇表現がある。以下の表2は、本堂寛 (1982 : 266-268) を簡略にまとめたものである。県内でも、もちろん地域により差がある<sup>(6)</sup>。



表2 岩手方言の待遇表現

	盛岡	一関
おいでになる	オデアル	ゴザリス
お食べになる	オアゲル	アゲエス
でございます	デゴザンス デゴアンス デアンス	デゴザリス デガス
(行き) ます	(イギ) アンス	(イギ) エス/ス
下さい	オグレットクナンシエ	ケラッシエ クンツエ

上の表2で見る限り、「だ」を最後に付加している表現はない。さらにいえば、黒人たちのことば遣いに「～してください」といった表現も頻繁に登場するが、そのような表現もない（例えば、荒訳で、マミーがスカーレットに「お食べください」(185)と言っている）。

全国の読者を対象としているため、特定の地域の方言を正確に使用できないのは当然であるものの、今回みたように、翻訳では、標準語の敬語をベースとして、どこか舌足らずで、ぎこちない、過度にへりくだった口調がつけられ、それが東北方言のイメージとして流通していく。その結果、東北方言には、まっとうな丁寧表現がない、粗野なことばだと誤解されてしまうことになる。つけ加えると、今回は扱わないが、語彙についても、標準語のくだけた、時に乱暴なイメージのものが採用されているため、余計東北方言は「粗野な」イメージとして強く印象づけられていくはめになる。下層にいる黒人奴隷のイメージが、東北方言、東北方言話者、東北地域を下層に位置づけていく。

### 3.3 継承される文末表現

2でふれたが、黒人の中でも、かしく、気がきくとされる老人ピーターのことば遣いには、従来の黒人奴隷のことば遣いに加えて、「博士語」もしくは西日本方言的なものも混じっている。この特徴は旧訳から継承されているものである。後者の特徴は、実は、スカーレットの父、苦勞人であり、年

老いたジェラルドのことは遣いでもある。物語では、ジェラルドは、アイルランド出身で、アメリカに長くいるものの、アイルランド訛りが抜けないとされている。翻訳では、「わし」「～じゃ」「しとる」などの、「博士語」か西日本方言的なことは遣いで訳されている。これらは、いわば、老人男性のイメージと結びつけられてきた表現である。以下は、ジェラルドが自分の馬のことを誇らしげに語る場面である。

「おまえを調教できるものは、この郡はおろか、ジョージア州にもおりはせん」(61、O)

「おまえにかなう馬はこの郡、いやこの州のどこを探してもおらんぞ」(65、K)

「クレイトン郡、うんにゃあ、ジョージアぜんたい探したって、おまえをまともに扱える人間なんぞあおらんぞ」。(76、A)

このように、旧訳でのジェラルドの特徴的な語りがしっかり継承されている。荒訳のジェラルドは、このような特徴を旧訳より頻繁に使っている。

もっと言うと、白人の主要な登場人物のことは遣いは、これまでみてきた黒人のことは遣いに比べて、旧訳をより徹底して継承しているといっても過言ではない。スカーレットの憧れの白人男性アシュレ（アシュリ（一））やレットは標準語や「男ことば」、スカーレットを含め、彼女の生涯の伴走者ともいえるメラニーなどの白人女性たちは「女ことば」で一貫して訳されている。

白人男性の例として、スカーレットに愛を告白されたアシュレが、これ以上語り合うのはやめようと制止する場面をあげよう。

「向うへ行こう。そして、こんなことを話しあったことなど一度もなかったように忘れてしまおうじゃないか」(249、O)

「さあ、もうここを出て、こんなことを言いあったのは忘れてしまわないか?」(260、K)

「スカーレット、いま言ったことをすべて忘れて、この場を出て行けないだろうか?」(265、A)

多少差があるが、標準語や「男ことば」が継承されている。

さらに、白人女性の例として、スカーレットがスチュアート家の双子の兄弟に向かって、戦争の話はうんざりだと訴える場面をみてみよう。

「もう一度戦争ということばを口にしたら、あたし、家のなかにはいってドアをしめちゃうことよ。」(11、O)

「いい、あといっぺん“戦争”って口にしたら、わたし家に入ってドアを締めるわよ!」(14、K)

「もう一度、<戦争>なんて言ったら、わたし、家の中へ引っ込んで扉を閉めてしまうわよ。」(24、A)

中村(2013)やInoue(2006)は、日本では女性があまり使用していない「女ことば」が白人女性のことばとして訳されることで、中流・洗練・女らしさといったイメージをともなって再生産されてきていることを実証している。この小説は、主人公スカーレットが、南北戦争の激しい中、時には殺人をもおかすという、逞しく行動的に生き抜く女性の物語ながら、翻訳は、新旧ともに「女ことば」で描かれている<sup>(7)</sup>。

上述した引用箇所の下線部にみられるように、「女ことば」でも、新訳は若干かわっている。「女ことば」といっても、時代により、文末表現も多少かわってくるのは当然である。が、新訳でも、一貫して標準語の「女ことば」を使用している。いや、旧訳よりも新訳の方が「女ことば」化が進んでいる

のではないかと思われる例がある。たとえば、以下の2例はいずれも、メラニーが産気づき、切迫した状況でスカーレットがプリシーに命令する場面である。

「あたしにもわからないんだよ。だから、きいてくるようにといってるんじゃないか」

「泣くのはおよし！メラニーさんにきこえるじゃないか。さあ、はやくエプロンを着がえに行きなさい。はやく」(2巻、303、O)

「さあね。だから、状況を訊いてきなさいと言ってるのよ」

「泣くんじゃないの！メラニーさんに聞こえるでしょ。さあ、エプロンを替えて、早く」(2巻、322、K)

「わからないわ。何かニュースを聞いて来るようになって言ってるのよ」

「わめくのはおやめ！ミス・メラニーに聞こえるわ。さあエプロンをかえてらっしゃい。急いで」(3巻、161、A)

次の例は、スカーレットが悪態をつく場面(独白)である。

(こんちくしょう！)(209、O)

(んまつ、あきれたもんね！)(220、K)

(こりゃ、ぶったまげた！だわね)(227、A)

旧訳よりも「女ことば」が使われていることが分かる。

さらに、2の具体例であげた、マミーがスカーレットに淑女のたしなみを諭す場面では、手本とすべき淑女の話し方が、英語の原文では、それまでの黒人英語と同様に表現されているのに対して、翻訳では、旧訳も含め、「女ことば」で表現されている。翻訳家の松岡和子氏は、シェークスピアの翻訳の際、現代にふさわしい訳をするために、「女性語」の語尾を極力排したと

いう<sup>(8)</sup>。このような発想は、今回の新訳ではみあたらない（今回みてきたようなジェラルドのことば遣い、そして、白人女性の「女ことば」、さらには、黒人のことば遣いなどは、実は、1938年、日本で初めて『風』を翻訳した阿部知二氏ら以降の、翻訳の基調ないし、基本路線となっているようだ）。

#### 4. 翻訳と日本語の可能性

以上をふまえ、『風』の新訳にみられる文末表現の特徴というテーマのまとめをしておきたい。

新訳も、旧訳から一貫して、白人については、「男ことば」「女ことば」を含めた標準語を、それに加えて、男性老人については、博士語、西日本方言的なものが使用されている。博士語・西日本方言は、黒人でも、「かしこい」老人の場合にも一部使用されている。「女ことば」については、むしろ強められている。

なお、黒人奴隷については、表1にあげた①から③を特徴にもつ、旧訳で用いられたような東北方言的なイメージをもつ表現が、特に荒訳については全員について、より強められた形で、鴻巣訳では特にプリシーに、依然として継承されている。しかし、鴻巣訳では、マミーは「女ことば」ではないものの、標準語を用い、ジェームズやピーターも旧訳のような表現をそれほど継承してはいない。そういう意味で、若干の変化はみられた。

新訳では、白人でも黒人でも、登場人物一人ひとりのキャラ作りとして、訳し分けしようとする方向にあるのかもしれない<sup>(9)</sup>。周知のように、フィクションにおける日本語の特に文末表現は、登場人物一人ひとりのキャラ作りをする上で重要な役割を担ってきた。したがって、原作ではそれほど区別しないことば遣いでも、翻訳になると、個性を際立たせるために、時に、うるさく感じられるほど様々な文末表現をつけてしまう傾向がある。それがはたして、原作の人物造型として適切なものとなっているのだろうか。

その上で、今回注目した黒人奴隷のことば遣いとして、東北方言的なものがイメージされる文末表現を継承することで、東北方言、東北方言話者、東北が下層階級に強く結びつけられ、その結果、日本語における標準語と方言、

もしくは日本社会での中央と地方といった序列化を強めてしまうことにならないか、危惧する。

さて、21世紀の現代、どのような翻訳が日本語の可能性を切り開いていくのだろうか。全く新しい文末表現を生み出していくことは至難の業に違いないが、せめて、地域方言のつまみぐいの利用からの脱皮を期待したい。

#### 注

- (1) 中島京子（『波』新潮社、2015年7月号、pp. 24-25）と中山千夏（『週刊金曜日』2015年7月号（1046号）、pp. 56-58）のコメントがある。
- (2) アメリカ文学において、トニ・モリスン（1994：85-87）は「黒人の登場人物の対話は、親しみがもてないものにしようとして工夫された綴りで、いかに故意にわかりにくくされ、耳慣れぬ奇妙な方言とされていることか」と批判的に論評している。翻訳での黒人のことば遣いも、「耳慣れぬ」方言のようなものかもしれない。さらに、『風』について、青木富貴子（1996：67）が、白人はきちんとした英語なのに、黒人の会話だけが南部奴隷訛りでつづられているのはおかしいと述べている。
- (3) フランク・J・ウェブ（2010）『ゲリー家の人々』では、黒人でも、地位や学歴、経済力がある場合は、標準語や「女ことば」で訳される場合もある。が、ゴロッキ白人や黒人奴隷などは、東北・中部・関西方言が入り混じった、どこか「奇妙な」方言で訳されている。このことから、最近の翻訳でも、地域方言が否定的なものとして利用されている。
- (4) 2015年10月の時点で、鴻巣訳は全巻出版されているが、荒訳は全6巻中、第3巻までである。その範囲での調査であることをご了承いただきたい。
- (5) 2011年4月から5月にかけて、アメリカの翻訳作品に登場する下層の黒人、もしくは黒人奴隷の会話を取り上げ、そこから受けるイメージについて、方言だと思うか、その場合、どこの方言かをたずねるアンケート調査を、静岡大学の学生109名（男性59名女性50名）を対象に行った。方言だと思う場合は、その根拠もあげてもらった。結果は、東北方言とする回答が男女共に約6割を占め、その根拠として、今回2で扱った①から③までの特徴をあげたものが多かった。ちなみに、調査で引用した作品は、リチャード・ライト『ブラック・ボーイ』（野崎孝

訳、岩波文庫2009年)とマーク・トウェイン『ハックルベリー・フィンの冒険』(石川欣一訳、研究社1958年)である。『風』ではないが、いずれの作品も今回扱った黒人奴隷のことは遣いとほぼ同様な表現で訳されている。

- (6) 岩手出身の私が、かつて地元で耳にしたものとして、相手に対して丁寧な誘いとして、「あがってけらい」(食べてください)といった表現がある。
- (7) 荒このみ(1981:583)は、本作品の魅力は、スカーレットの強靱な意志力にあると述べている。
- (8) 松岡氏は、『ロミオとジュリエット』の翻訳で、「女性の私が訳すのだから、今の女優さんがジュリエットを実感できる日本語にと思ったのです」(『朝日新聞』2014年7月15日)と語っている。また、静岡大学で講演した際、「ジュリエットの訳はあまりなよとしたところを出したくない。原文にないものを、つまり、余計なものを足さないこと、そうしないと劣化する」と述べていた(2015年7月15日)。字幕翻訳家の戸田奈津子氏も、勇猛な女性兵士には、「極力、女性言葉を避けた」という(『朝日新聞』2014年9月8日)。
- (9) 鴻巣(2015:538-539)は、あとがきで、「キャラクターの個性を伝えるために、架空の方言のようなものや、ややごちない話し方を採用した場合もある」「訳し分けるのは容易<sup>たやす</sup>くはなかった」「訛りというよりたぶんにステレオタイプな「役割語」の色合いもある」と述べている(『風』第5巻)。登場人物の「個性」は、今回みてきたような文末表現を使って「訳し分け」しなければ、伝わらないものだろうか。

#### 参考文献

- 青木富貴子(1996)『「風と共に去りぬ」のアメリカ』岩波新書
- 荒このみ(1981)『「大地」と『風と共に去りぬ』』『英語青年』127-9 pp.583 研究社
- 荒このみ(2009)『マルコムX一人権への闘い』岩波新書
- ウェブ、J. フランク(2010)進藤鈴子訳『ゲラーイ家の人々—アメリカ奴隷下の自由黒人』彩流社(原作品は1857年出版)
- 金水敏(2003)『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 東条操監修(1961)『方言学講座 第2巻』東京堂

- 都川典子 (1994) 「翻訳に見る方言イメージの活用技法」『東京女子大学言語文化研究』 3 pp. 90-101 東京女子大学言語文化研究会
- 中村桃子 (2013) 『翻訳がつくる日本語』 白澤社
- 彦坂佳宣 (2006) 「『行くダ』などの言い方をする方言群とその性格」『名古屋・方言研究会会報』 23 pp. 1-11 名古屋・方言研究会
- 藤原与一 (1959) 「国語諸方言上の「ダ」「ジャ」「ヤ」」『広島大学文学部紀要』 15 pp. 128-154
- 本堂寛 (1982) 「岩手県の方言」『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』 pp. 237-270 国書刊行会
- モリスン、トニ (1994) 大社淑子訳『白さと想像力』 朝日新聞社
- ロング、ダニエル・朝日祥之 (1999) 「翻訳と方言」『日本語学』 18-3 pp. 66-77 明治書院
- Hiramoto, Mie. (2009) Slaves speak pseudo-Toohoku-ben: The representation of minorities in the Japanese translation of *Gone with the Wind*. *Journal of Sociolinguistics*, 13-2, pp. 249-263.
- Inoue, Miyako. (2006) *Vicarious Language*. Berkeley: University of California Press.
- Mitchell, Margaret. (1973<sup>21</sup>) *Gone with the Wind*. Chicago: Avon Books

#### 引用翻訳作品

- 大久保康雄・竹内道之助訳 (2004) 『風と共に去りぬ』 (56刷) 新潮文庫
- 荒このみ訳 (2015) 『風と共に去りぬ』 岩波文庫
- 鴻巣友季子訳 (2015) 『風と共に去りぬ』 新潮文庫

#### 参考翻訳作品

- 阿部知二訳 (1938) 『風に散りぬ』 河出書房
- 深澤政策訳 (1938) 『風と共に去る』 第一書房
- 藤原邦夫訳 (1939) 『風と共に去れり』 明窓社
- 大久保康夫訳 (1949) 『風と共に去りぬ』 三笠書房

(くまがいしげこ・静岡大学)